

「只見 移住物語」

学術（ブナセンター）編

編集・連絡先：只見町役場 地域創生課

TEL 0241-82-5220

FAX 0241-82-2117

「只見 移住物語」

学術（ブナセンター）編 目次

- 第一章 《只見の人の暮らしは新鮮で、自然も珍しく、生態学の教科書で学ぶことを目で見ることが出来ます》
遠藤 菜緒子 様 (47 歳)
- 第二章 《昆虫だけでなく植物も見えています。なにかこれを調べてみたいとテーマが決まると、その年は、それをずっと追いかけてライフワークみたいになります》
緒勝 祐太郎 様 (29 歳)
- 第三章 《自然環境の変化に合わせて、生き物も色々と生態が変わっているのではないかと、気づきの機会が得られたのは大きかった》
吉岡 義雄 様 (30 歳)
- 第四章 《ここは環境が良く、生き物好きにはいろいろと遊べる。自分が本当に興味を持っていることに時間を費やす時期があって良いと思う》
太田 祥作 様 (25 歳)

「只見 移住物語」

只見町役場 地域創生課 ユネスコエコパーク推進係

理学博士

【移住者のご紹介】

- ・お名前：遠藤 菜緒子 様 (47歳)
- ・ご家族：コン (猫1歳)、小夏 (猫2ヶ月)
- ・いつ：2013年4月
- ・どこから：埼玉県 川口市
- ・どこへ：只見町 只見地区 只見区
- ・いましていること：ブナセンター指導員を経て、現在 ユネスコエコパーク推進係として
ブナセンター庶務、ユネスコエコパーク事業の推進業務をしています。
- ・まえにしていたこと：東京理科大学 ポストドクトラル研究員



「ふるさと館 田子倉」駐車場にて

【始まり】

東京理科大学のポストドクトラル研究員(博士号取得後に任期制の研究者として、大学に留まる若手研究者を支援する制度)のときに、生態学関連のメーリングリスト Jeconet を通してブナセンターを知り、ブナセンター指導員へ応募をしました。

ポストドクトラル研究員の時は、中高等教育のための教材開発をしていました。高校や大

学で使えるような教育ツールの開発です。具体的に言うと生態学に関連する教材で、私は鳥類と人間との軋轢（あつれき）問題をテーマとした教材開発に取り組んでいました。

例えばカワウという鳥ですが、1940年代から1960年代にかけて環境汚染や生息地破壊により激減し、日本の中に繁殖地が2カ所しかありませんでした。この鳥が1970年代から1980年代にかけて急に増えたのです。急に増えたカワウは魚を食べることから漁業問題となりました。当然人間はカワウを「この鳥は悪い鳥だ」と言い、敵視するようになります。でも、カワウの存在が悪いとか悪くないと言うことではなく、カワウは自らの生態に従って暮らしているだけなのです。カワウが増え、人間は迷惑だと言いますが、そもそも人間のせいでカワウが減少したが、自然環境が良くなり回復してきたということなのです。人間が川を人工的にしたことによってカワウが増えやすい環境になってしまった、そんな背景もあります。

この様な人間と動物との軋轢（あつれき）を単に感情的に処理するのではなく、客観的に、科学的証拠を集めて理解できる教材作りを目指していました。当時の学習要領は「思考心」とか「判断力」を養い生きる力を育むことが求められていましたので、それにつながる、言い換えると多面的に物事を見る能力を養うための教材であり、動物を理解し生態学から人間社会の問題点を包括的に扱う教材を作ろうとしていました。

【家族】

只見町に住むことについて、母親から何か言われたことはありません。母は仙台にいて、私は今まで（仙台から）一番遠くて兵庫県、次に埼玉に住んでいたのです。そして福島県（只見町）となって、少しずつ実家、仙台へ近づいていたので母親は内心喜んでいたと思います。でも仙台までたどりつかずに、只見町に定住してしまいました。

【準備】

ブナセンターの指導員へ応募し、試験を受けるために初めて只見に来たのですが、前もってたいした情報を持たずに来たので雪の多さには驚きました。その年は積雪がとても多い年だったと思います。2013年2月下旬に採用が決まり、私は猫を飼っていたので猫が飼える住居を探しました。でも町に不動産屋さんはなく、『どこに住めばいいのかしら』と一瞬不安になったのを覚えています。

結局は、町に用意して頂いた定住者促進住宅に住むことになりました。そこでは猫は飼えないので実家に預けることになりました。実は、只見に来た当初 私はもう一つ仕事を持っていました。仙台市にある東北工業大学で、週に2コマ 非常勤講師をしていたのです。そのためブナセンターの指導員として週4日勤務し、残り3日間を仙台へ戻り、授業を行うという生活スタイルとなりました。猫は実家で暮らし、私は週の半分ずつを仙台と只見で暮らしていました。

その後 非常勤講師を辞め、お世話になっている地元の方にお世話頂き、いま住んでいる一軒家を借りることが出来ました。猫と一緒に暮らしています。

【現在】

現在は町役場の職員となりユネスコエコパーク推進係に配属され、ブナセンターの庶務関係、ユネスコエコパーク事業の推進の仕事をしています。



野外観察会で参加者へ話しかける遠藤 博士（理学）

【変化】

移住して良かったと感じる事は、私生活が豊かになったことだと思います。

ここに来るまでは「研究」中心の生活でした。一日中「研究」のことを考えていて、もちろん休みの日もありましたが、休みの日もやはり「研究」に関連したことを考えているような毎日でした。こちらに来てからは山を歩いたり、畑を作ったり私生活の楽しみを見出せるようになりました。

只見に来た当初 4～5 年間、仙台の非常勤講師とブナセンターの両立で、只見のことを知る時間はほとんどありませんでした。非常勤講師を辞めて、一軒家に移ってから本当に只見らしい暮らしが出来るようになりました。畑を作ったりとか、近所の人と道端でお話をしたり、まち湯（只見保養センター「ひとつぷろまち湯」）に行くとか、そんな些細なことです

が私にとっては新鮮で豊かな時間をすごせています。私は野鳥の生態に関する研究で博士号をとりましたが、現在は自分の研究はほとんどできていません。

私は「ゴイサギ」の生態研究をしていました。先日 只見で「ゴイサギ」の「ねぐら」を発見したのですが、ただ只見では「ゴイサギ」の数が少なく十分な研究データは集められません。私のこれまでの研究方法は、観察が基本で時間がかかるのです。観察の時間が長ければ長いほどデータを集めることができます。

植物の研究では山を歩き、サンプリングをして、研究をすることもできるかもしれませんが、鳥類の生態学は一カ所に行ってもすぐにデータを取れるというのではなく、限られた時間では観察に行っても正確なデータが取れませんので、やはり私の分野に関しては現在の状況では研究を続けることは難しいと考えています。

研究者として出来ることは限られると思いますが、いま只見の鳥類層を把握する程度のことにはしたいと感じています。

【将来】

研究していた時の生活は本当に大変でしたので、今の日常生活が続くことを望んでいます。仕事では只見の町の人ともっと関わりを持ちたいと思っています。只見のことをもっともっと知って、その良さを町外に発信し、町の人にも再確認してもらえるような仕事がしたいです。私生活では、只見の自然と人の中でゆっくりと暮らしたいです。

【不便】

来た当初は猫と暮らせないこと、雪の事が大変でした。最初の頃は仙台に通っていただけだったので特に買い物に関しては困ったことはありませんでした。いまでも買い物で困ったことはありません。

【健康】

実家に戻る際に、かかりつけのお医者さんへ行くようにしています。ビールが好きです。特に一日の終わりに飲む一杯のビールは幸せです。

【アドバイス】

私は、只見に来てからある程度の時間をおいてから集落に入りました。また、それまでの間に親身にお世話をしてくれる地元の方々と出会い、お付き合いすることが出来ましたので苦労はありませんでした。近所の方と仲よくしようと心がけていました。これから来られる方には、ほどほどの距離感を保ちながら、時間をかけて仲よくする（溶け込んでゆく）ことが良いと思います。

はじめて就いたブナセンターでは、附属施設の展示、講座、観察会を通して町の自然や文化について解説する仕事をしていました。そのため資料文献などを通して町の良いところをたくさん知る機会が持てました。私は比較的都会育ちなので、本当に自然と共に暮らす只見の人の暮らしは新鮮で、自然も珍しく、生態学の教科書で学ぶことを目で見ることが出来る、そこに感動しました。

都会とは違う価値観がありますが、それをこの町の良さとして受け止めて、むしろ学ぶ姿勢でお付き合いしてみてください。

【印象】

初めて只見に来た時に、あまりの雪の多さに衝撃を受け、不安に思いましたが、只見で一冬を過ごしてからは只見で暮らしたいと思うようになりました。雪が好きなのです。冬になるとテンションが上がると言うか、ブリザードの中を歩いて出勤するのは気持ちいいですね。いちめんが真っ白になる、あの景色が大好きです。本当に只見は自然が良くて、いいですね。

2020年6月15日 職場にてインタビュー

インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

ブナセンター 専門指導員・理工学博士(昆虫生態学・保全生態学)

【移住者のご紹介】

- ・お名前:^{おかつ ゆうたろう}緒勝 祐太郎 様 (29歳)
- ・ご家族: 父 (58歳 山形県 米沢市)、兄 (独立 30歳 北海道)
- ・いつ: 2019年4月1日
- ・どこから: 山形県 米沢市
- ・どこへ: 只見町 只見地区 只見区
- ・いましていること: ブナセンター 専門指導員
- ・まえにしていたこと: 理工学部 環境システム専攻 大学院生



観察会での説明

【始まり】【準備】

移住する前は学生、大学院生でした。ブナ林の昆虫相を研究していました。普段もライフワークとしてブナ林を調査して歩いていましたので、ブナ林があり、博物館がある只見町を選びました。博物館関連の就職検索サイトを見てブナセンターのことを知り、応募しました。

一次試験では書類選考があり、二次試験として面接と小論文がありました。採用となって、普段生活している最低限のものを車に積んで町営住宅に引っ越してきました。2019年は雪が少なかった年ですが、4月2日に一晩で50cmの積雪があって驚きました。只見町に来る、移住することについて不安は全く感じませんでした。

【家族】

父親へは「只見町で、仕事がきまりましたので引っ越します」と報告しました。私が、只見町に移住したことで、特に父親に変化は起きていません。

【現在】【変化】

ブナセンターの専門指導員としての業務と共に、ふるさと館 田子倉にも勤務しています。こちらに来てよかったと思う事は、この地域には伝承産品というものがありますけど、自然のものを使った生活文化が今でも根付いていて、例えばザルとか、マタタビ細工とかですね。そういったものを実際に、ブナセンターに来られる町民の方に教わる事が出来て、自分の知識を増やせ、経験できたことが良かったと思っています。

私の本来の専門、大学で研究していたものは甲虫目オサムシ科の生態学です。今も続けていますが、同時にブナ帯に住む人々の生活文化にも、とても興味を持っていました。山形県の小国町が、私の研究の調査地で、只見町のようなところですね。いまでもクマ狩りが行なわれ、籠あみをしているようなところですね。学生の時から、そのようなところに関わってましたので、只見町にも興味を持ちました。

こちらに来て生活パターンは、学生時代と比較すれば、もちろん変化していますが、自分の中に、なにか変化が起きているとは感じません。いま自分のキャリアを築いている、作っているというようにも感じていません。ここで仕事をして、暮らしていくことの位置づけはまだ考えたことがないと言うのが正直な気持ちです。



ブナ帯の森林に棲むホソアカガネオサムシ

【将来】

いま楽しみにしていることは、山歩きして、只見に限らず色々な南会津の山を歩いています。昆虫だけでなく、植物も見えています。なにかこれを調べてみたいとテーマが決まると、その年は、それをずっと追いかけてライフワークみたいになります。例えば、何かの分布調査だとか、それが楽しみですね。

職業柄と言うか、研究職はどうしても、いまのような仕事（公募がでて、それに応募し、採用となる）になってしまいます。自らやりたいと思う分野や、職務領域があっても、公募がない限りはなにも動けません。これからやりたいことについて、いまは長期的な視点をもっていませんが、これまでも研究者として仕事をしてきましたので、これからも研究者の仕事をしていきたいと考えています

【不便】

住宅のお風呂ですね。ガス炊きの古いタイプ、水を張ってから温める方式なので時間がかかり、ガス代もかかりますね。毎日「まち湯」に行っています。入浴料は300円ですから。雪は、自分の地元が米沢なので、それほど困ったことにはなっていません。

【健康】

暴飲暴食をしないように、動くようにも心がけています。お酒も飲み会の時だけです。他に健康面で注意していることは特にありません。

【アドバイス】

移住してきたという感覚より、むしろ自分に適した仕事を選んだら、それが只見町であって、引っ越してきたという感じです。自らの経験で、こうしておけば良かったと、いま思う事はありません。

【生活】

ご近所とのお付き合いはあります。もちろん近隣の方に挨拶はするように心掛けますが、住いの両隣の方が住宅前でよく BBQ をされていて、声を掛けてもらい一緒にご飯を食べたりして、それが機会となりお付き合いが始まっています。

【印象】

移住したときの只見の印象とか、移り住んで驚いたことについて、思い出そうとしても、すぐ出て来ません。雪は、実家が只見町のような環境で、町から離れている山の中なので、同じ感じでした。

2020年9月25日 ブナセンターにてインタビュー
インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

ブナセンター 専門指導員・農学博士（応用昆虫学・生態学）

【移住者のご紹介】

- ・お名前：よしおか よしお吉岡 義雄 様（30歳）
- ・ご家族：父（65歳 千葉県）、母（60歳）、弟（独立 25歳 沖縄県）
- ・いつ：2020年4月
- ・どこから：茨城県 土浦市
- ・どこへ：只見町 只見地区 只見区
- ・いましていること：ブナセンター 専門指導員
- ・まえにしていたこと：大学院 博士課程を満期退学後 農学博士号を取得



ブナセンター エントランスにて

【始まり】

博士課程を満期退学するまでは大学の学生寮に居ましたが、満期退学後は民間アパートへ引っ越し、博士論文に取り組みました。博士論文を作成していた約1年間、アパート暮らしをしました。博士号を取得に目途がつく頃、生態学関連のメーリングリスト Jeconet を通してブナセンター公募を知り、応募しました。就職先としては、企業の営利的なところより、公的なところを望んでいました。

【家族】

只見町 ブナセンターに勤務することは家族へ話をしました。両親も、就職先がなかなかないということを承知していましたので、反対はしませんでした。ただ只見町のことを知らなかった、情報を持っていなかったの少し心配したようです。新型コロナウイルス感染が拡大し始めた時期でもあり、まだ両親は只見町を訪れていません。落ち着いたら呼んであげようかと考えています

【準備】

2月下旬から3月上旬でしたか、一次審査の書類審査に通りました。次に二次審査では小論文と面接があり、お蔭様で採用となりました。その後に町営住宅を準備して頂き、それからあわてて引っ越しの準備に入りましたのでドタバタした感じです。住居の引っ越し先が決まらなると、引っ越し業者へも声が掛けられません。引っ越し屋さんに声を掛けられるようになったときは時期的に引っ越しシーズンに入っていて、何とか引っ越し業者さんを見つけ、運んでもらえるものは運んでもらい、残ったものは郵送で送りました。

気が付くと、なんだかんだと引っ越しにお金がかかってしまいました。金銭的に余裕があるとは言えない学生から、社会人になる移行期間なので、最初にお給料を頂くまで色々と苦労しました。

自分は車の免許は持っていますが、車自体を持っていないので只見で車がなくて仕事をやって行けるのか心配しました。自転車を持ってきたので只見の町中を自転車で行き来しています。

【現在】

常設展とか、何か研究をしようという話しになっていて、それらをどのように進めるか、考えることがとても楽しいです。自分の技能を活かして貢献できたらいいなと考えています。

【変化】

移住して良かったと感じる事は、先ず経済的に自立できたということですね。次は、こちらに来ると自然環境も変わり、茨城にいたときとは環境が変わりましたから、当然 別な生

き物が生活しているのです、それらを見ると、自分は研究者なので「これからどんな研究をしてゆこうか」と考えています。自然環境の変化に合わせて、生き物も色々と生態が変わっているのではないかと、気づきの機会が得られたのは大きかったですね。

私がこちら（福島）に最後に来たのは、おそらく小学生か、中学生のときだと思います。只見町に来たのではなく会津若松や裏磐梯へ行きました。福島にまったく馴染みがなかったわけではありませんが、ただ自分の好きな虫は、どちらかというところ暖かい環境にいる虫なので、旅行とかも基本的には暖かいところばかりに行っていました。こちらに来て、今まで目にしたことのない生き物が見られるようになりました。



ブナセンター 休憩室にて

【将来】

研究者として、いましていることを発展させたいと考えています。すぐに大きな変化を望んでいる訳ではありません。いまスタートしたところで、研究者としてこの先どのような展開が待っているのか、正直なところ想像がつかないからです。

でも、いまは毎日が楽しいです。冬が来るまでは楽しいです。なぜなら色々な生き物がいますからね。色々な生き物を見ているのは楽しいです。

【不便】

暮らし始めて困ったことは、ここは意外とお金がかかると思いました。都市部と比較すると食材が高い気がします。雑貨も高いですね。百均もないし。競争がなく、輸送費も高いからでしょう。あとはやはり車がないと都市部から来た人にとっては不便だと思います。都市部では車のないライフスタイルが当たり前ですが、こちらでは車のあるライフスタイルが当たり前になっている。このライフスタイルの変化はかなり難しいと思います。特に رفتったり来たりする人（二地域居住者）は、大変でしょうね。都市部と比較して公共交通機関が不足していますから。

新町住宅からブナセンターまでは自転車で10分程度です。冬に歩くとなると30分はかかるかと思います。只見に来た年の冬は雪が少なかったと言われていますが、これから迎える冬が初めての体験です。防寒着はそれなりに準備しています。

【健康】

健康面で注意していることはないです。普段から意識したことがないです。

【アドバイス】

こうしておけば良かったと思うことは移住には直接関係しないかもしれませんが小学生、中学生の頃に英語に対して苦手意識を持たないようにしておけばよかったと思います。論文は英語で書くのですが、その時にめちゃくちゃ苦労しました。いまだに論文（英語）を読むことには苦労します。いままで私がしてきた研究は、高価な機械が必要になる研究でしたので、やはり組織の後ろ盾がないと個人では続けられないのです。なので、それを機に自分がやってみようと思っていた研究をするのですが、つまり分野が変わってしまうのですね。これが苦戦の原因です。

【生活】

ご近所とのお付き合いは、いまのところ、ほとんどありません。逆に言うと、それが助かっています。もちろん顔を合わせれば、挨拶をしています。ただ都市部では、あまり親密にお付き合いすることはないので、そのところは気が楽です。

【印象】

来たばかりの時は、まだ冬でしたので草木も芽生えていなくて何もありませんでした。何も無いところだなあと思いました。移り住んで時間が経過すると、自然環境が豊かで、いろいろなフィールドがあることが分かりました。

2020年9月25日 ブナセンターにてインタビュー
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

ブナセンター 指導員

【移住者のご紹介】

- ・お名前：太田 祥作^{しょうさく} 様 (25 歳)
- ・ご家族：父 (長野県 65 歳)、母 (58 歳)
- ・いつ：2020 年 5 月
- ・どこから：東京都 豊島区
- ・どこへ：只見町 只見地区 只見区
- ・いましていること：ブナセンター 指導員
- ・まえにしていたこと：環境調査企業 会社員



ブナセンター 休憩室にて撮影

【始まり】【準備】

大学では生物科学を専攻しました。細胞生物学とか、分子とか、生態系とか、生物学を広く学びました。卒業後に環境調査企業に入社しました。東京近県、例えば長野県などへ出張し、生態調査とか環境調査を行う仕事です。自治体や、建設コンサルタント会社が元請となって環境調査をする際に、私が務めている環境調査企業へ調査を委託するという流れです。

その環境調査会社に3年間勤務し、2020年4月いっばいで退職しました。退職した理由を一言で言うなら、自分が自由に使える時間が欲しくなったからです。生態調査や環境調査を行う時期と、自分が本当に興味を持っている対象を調査する時期とが重なるため、自分のために時間が使える環境へ移ろうと考えました。

また業務上 得られたデータは元請の自治体、建設コンサルタント会社に所有権が帰するため、守秘義務が課せられて、自由に公開は許されていません。自分の life work となる調査や研究を自由に行い、out put 出来る環境へ移ろうと思いました。

しばらくのんびりしようと思っていたのですが、このコロナ禍でそうもしてられなくなり、再び就職先を探し始めることになりました。折しも親しい友人が「只見町 ブナセンター」で募集があると教えてくれました。調べてみると「環境が良く、生き物好きにはいろいろと遊べる」ところで、とても良いところだと思えたので応募しました。それが只見町を知ったきっかけです。

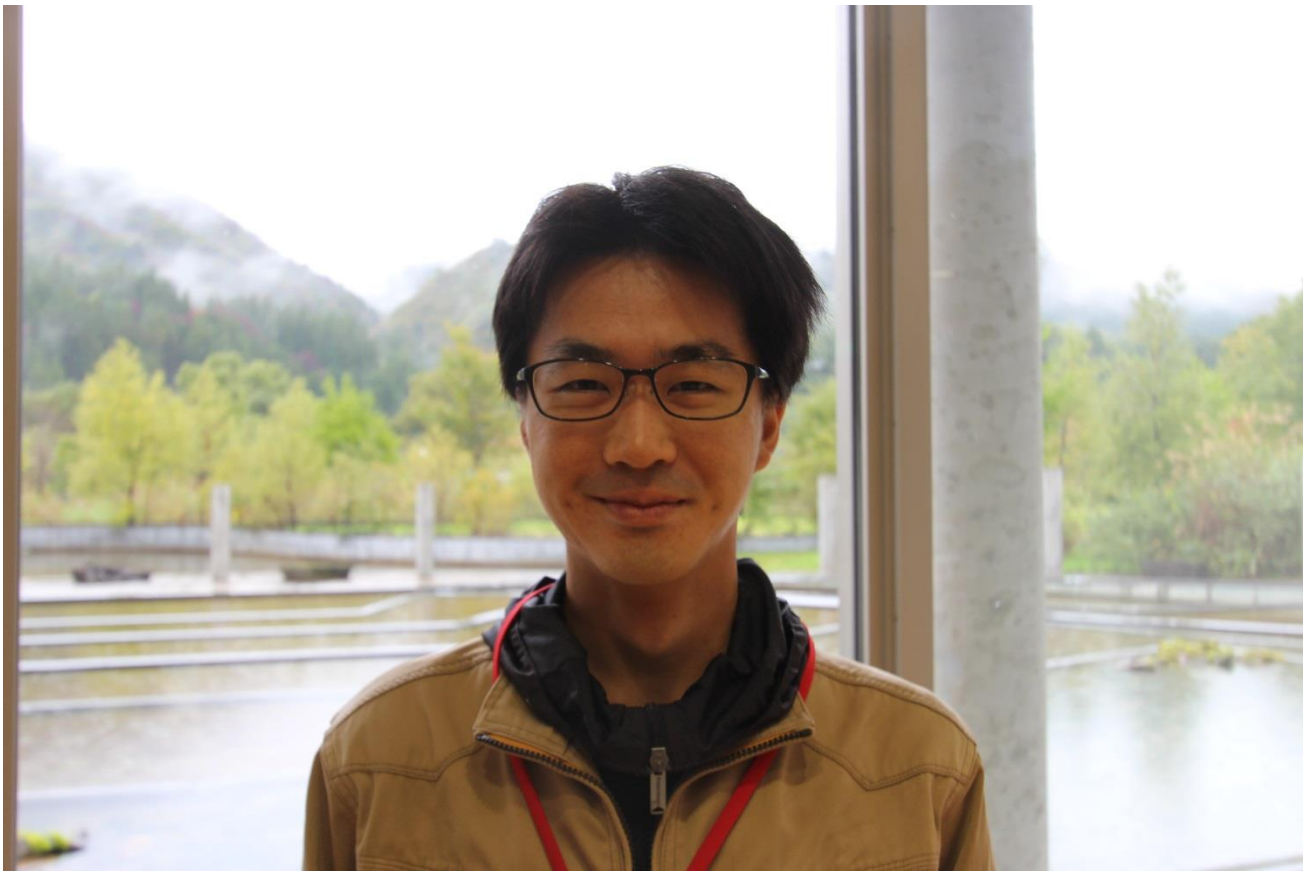
4月上旬だったと思いますが一次審査の書類選考に通り、次の課題で小論文を提出しました。コロナ禍でなければ只見町へ行き面接を受けるのですが、web 面接を受けました。採用の連絡を頂き、2020年5月に初めて只見町に入りました。町が準備してくれた町営住宅に入居しました。

【家族】【現在】

学生時代から親元を離れ、社会人となってからも一人暮らしをしていたので、只見町で働くことについては報告をしましたが、特に相談という事はしていません。只見町について両親が持っている情報は少なく、場所を教えると「えらく遠いね」と言っていました。

結果として、東京から只見町へ移り住みましたが、私の場合「移住」とは少し違うかもしれません。面白そうな仕事が見見町にあって、個人的にも興味のあることがあり、引っ越してきたという感じですか。ここは環境が良く、生き物好きにはいろいろと遊べる」ところで、とても良いところだと思えました。ですからここに来るときも、住んでからも不安を感じたことはありません。

強いて不安と言えば「冬がとんでもなく厳しい」と聞いています。只見町に来たのは5月でしたので、これから迎える冬が初めての冬になります。車を持っていないので想像出来ませんが、冬の徒歩通勤はどうなるのかなあと、町営新町住宅からブナセンターまで歩いてくると30分位かかるのでしょうか、少し心配ですね。



ブナセンター 休憩室にて撮影

【変化】【生活】

やはり自分の自由になる時間が沢山あるという事、自然が沢山あるという事ですね。前職の環境調査会社は、内業はフレックス制でしたが、夜は8時、9時位まで仕事をしていました。時には10時になることもありました。現場では朝早くから作業にかかることもあり、納期（締切）が迫るとやはり夜遅くまで頑張りましたね。

自ら変わったのは、以前と比べて自炊することが多くなりました。ブナセンターで働いていると、住人の方々やブナセンター友の会の方々と顔見知りになるので自分の畑で作った

お野菜を頂くことがあります。

ご近所とはお会いすれば挨拶をするように心がけています。

【将来】

いま只見で過ごしている時間は、自分のキャリア作りとは別に考えている、そんな気がします。趣味と言う言葉が適切かどうかは分かりませんが、自分が本当に興味を持っていることに時間を費やす時期があって良いと思うのです。そう、好きなようにやってみる時間ですね。「ここは環境が良く、生き物好きにはいろいろと遊べる」と言いましたが、自分は生き物の中で、トンボに関心を持っています。日本にはトンボが 203 種いるのですが、ここには 60 種ちょっと超える程度 生息しているかと思えます。今までに 60 種を確認しています。あとまだ何種類かはいるはず、あと 5 種ほどかな、それらを来年、再来年 頑張っ て full complete したいですね。基本は写真で確認していますが、そろそろ標本も作ってみたいと考えています。トンボ以外にもいろいろと関心のあるものもあります。ゲンゴロウとかですね。水生昆虫は秋がいいのです。最近「ゲンゴロウ トラップ」というものを仕掛けています。ペットボトルの上の部分を取り、さかさまにして、その中に煮干しとか匂いが出るような餌を入れて、池に浮かべておくのです。ゲンゴロウ トラップを沈め てしまうと、トラップに入ったゲンゴロウが窒息して死んでしまいます。浮きを入れてお いて、少し空気を残しておくのです。

【健康】【不便】

いま健康面で注意、意識していることはないです。

ATM はあっても、早く閉まってしまいます。勤務時間中にほぼ終わってしまいます。平日の時間でしか利用できません。あとは、やはり物価が高いですね。

やはり車、自動車ですかね。想像出来ませんが冬の徒歩通勤はどうなるのかなあと、少し不安ですね。

【アドバイス】

ブナセンターに来る人は、第一に「仕事」があつて来ていると思います。その仕事があるのと、個人的な興味や活動に、この場所がいいからと考えてきている人が、たぶん多いのではないかと思います。そうでなければ「応募」はしないと思います。

ブナセンターの人の多くは、恐らく経済的な処遇よりも、自分の好きなものがある、好きなことが出来る場所なのでやってくる人たちです。先ほどもすこし触れましたが自分はキャリア作りを考えて、ここに来たのではありません。キャリア作りという事を意識したことがありませんでした。

もちろん、ここで過ごす時間、経験が自分のキャリアへ繋がれば、それはいいことかもしれませんが、いまは「趣味に留めていていい」そんな気持ちです。年齢が若いので、断言できませんし、うまく表現できるか自信がないのですが、只見で過ごす時間、経験は自分の生き方、人生を豊かにしてくれるとは感じています。

【印象】

只見町に移り住んで、最初の印象は「広いな」でした。娯楽施設や外食できる場所とかがないと思いました。

2020年10月12日 ブナセンターにてインタビュー
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博